

# 小高の自然調査報告書

南相馬市博物館



# 刊行のあいさつ

このたび、「小高の自然調査報告書」を発行することとなりました。

南相馬市小高区は西方に阿武隈高地の八丈石山、懸の森山をはじめとする山林が広がっています。これらが受け止めた雪雨は二級河川・小高川をはぐくみ、太平洋へと水をそそぎ、海岸部を前河浦や旧井田川浦、村上城跡等の地形が特徴づけています。このように、豊かな自然に囲まれていることを背景として、小高区は長い発展の歴史を重ねてきましたが、これまで小高区のまとまった自然調査はなされてきませんでした。

そのようななかで、2011年におきた東北地方太平洋沖地震による津波によって、この小高区の海岸部も大きな被害を受けました。さらに、東京電力(株)福島第一原子力発電所事故による長期にわたる住民の避難が重なり、従来の動植物の生態系や自然景観は大きく様変わりしました。

2016年7月の小高区の避難指示解除に向けて、この地域が新たな復興のかたちを模索するなか、防潮堤や海岸防災林をはじめ、さまざまな生活基盤の整備とともに、文化資源である自然の基礎情報の必要性がよりいっそう高まっていました。そこで、当館は2016年6月から本報告書のための調査事業をすすめ、今回、地質・化石、植物、菌類、鳥類、哺乳類、昆虫の各分野の専門家による調査報告を取りまとめることとなりました。

本報告書は調査概要とリストを主としており、地域の自然を愛する子どもから大人までが、それらを知るための入門書として、また、図鑑等を参照する際の足掛かりとして、活用していただければ幸いです。

おりしも本報告書の発行と時を同じくして、日本の「生物多様性国家戦略 2023-2030」の策定がすすめられています。環境・社会・経済分野等の諸課題の解決に向け、「ネイチャーポジティブ」を合言葉に、自然の豊かさを応用した取り組みが加速していくことが予想されます。目まぐるしく変化する社会情勢のなか、本報告書がこの地域の持つ文化的資源を正しくとらえることを助け、新しい小高区のまちづくりのために活かされることを願ってやみません。

結びに、本事業発足以来、資料の調査・収集にご協力をいただいた市民のみなさま、ならびに関係機関のみなさまに心より感謝申し上げます。また、長期にわたり調査・執筆にご尽力いただきました関係委員の方がたに深く敬意を表し、刊行のあいさつといたします。

令和5年7月

南相馬市博物館

館長 堀 耕 平

# 目次

刊行のあいさつ .....	i
凡例 .....	iv
<b>第1章 小高の地形・地質・化石</b>	
<b>第1節 地形・地質</b> — 1億年の歴史をもつ小高の大地— .....	1
<b>第2節 岩石・化石</b> .....	2
1. 中生代 — 白亜紀花崗岩類— .....	2
2. 新生代 .....	3
<b>第3節 第四紀の地形形成</b> .....	14
1. 段丘堆積物 — 村上城跡— .....	14
2. 沖積層 — 井田川浦— .....	15
3. 双葉断層 .....	16
<b>第2章 小高の植物</b>	
1. 自然と植生 .....	17
2. 植物相 .....	18
3. 保護上重要な植物（絶滅危惧種） .....	21
4. 櫻井コレクション .....	26
5. 植物リスト .....	27
<b>第3章 小高の菌類</b>	
1. 調査の概要 .....	60
2. 菌類リスト .....	61
<b>第4章 小高の哺乳類</b>	
1. 調査の概要 .....	67
2. 哺乳類リスト .....	69
<b>第5章 小高の鳥類</b>	
1. 鳥類生息環境の区分 .....	71
2. 調査の概要 .....	71
3. 保護上重要な鳥類 .....	73
4. 鳥類リスト .....	74

## 第6章 小高の昆虫類

第1節 コウチュウ目（陸生）	79
1. 調査の概要	79
2. コウチュウ目（陸生）のリスト	80
第2節 バッタ目、ハチ目アリ科	85
1. バッタ目	85
2. ハチ目アリ科	86
3. バッタ目・ハチ目アリ科のリスト	87
第3節 チョウ目	92
1. 調査の概要	92
2. チョウ目のリスト	92
第4節 カゲロウ目、カワゲラ目、ヘビトンボ目、アミメカゲロウ目、トビケラ目	94
1. カゲロウ目	94
2. カワゲラ目	96
3. ヘビトンボ目とアミメカゲロウ目	98
4. トビケラ目	99
5. カゲロウ目・カワゲラ目・ヘビトンボ目・アミメカゲロウ目・トビケラ目のリスト	102
第5節 トンボ目、カメムシ目（水生）、コウチュウ目（水生）	109
1. トンボ目	109
2. カメムシ目（水生）	110
3. コウチュウ目（水生）	111
4. トンボ目・カメムシ目（水生）・コウチュウ目（水生）のリスト	113
第7章 小高の天然記念物	119

### 関係者一覧

執筆者	122
協力機関	123
協力者	123

# 凡 例

1. 本書は、「小高の自然調査報告書」である。
2. 小高の生活環境や社会生活基盤である自然を調査し、調査成果を公表・公開することで、ふるさとの良さの再発見や郷土愛の醸成を図り、小高の再生に資することを目的とする。専門書としての充実した内容を目指しつつ、読み手である市民にも分かりやすい内容とすることを心がけた。
3. 本書は、「1章 小高の地形・地質・化石」「2章 小高の植物」「3章 小高の菌類」「4章 小高の哺乳類」「5章 小高の鳥類」「6章 小高の昆虫」「7章 小高の天然記念物」で構成した。「魚類」「両生・爬虫類」等に関しては調査成果が十分に蓄積されていないため、今回は成果の公表にいたらなかった。
4. 原則として常用漢字、現代仮名づかいを用いたが、固有名詞・専門用語等でこれに依り難い場合には表外字を使っても良いこととした。
5. 年紀は西暦を用いることを原則とし、必要と思われる箇所には適宜和暦を補記した。
6. 各章の冒頭右に執筆者名を五十音順で示し、概説および各分野での確認種リストを配置した。ただし、第6章については節が多岐にわたることから、執筆者名および確認種リストを節ごとに記載した。
7. 動植物名の表記は和名をカタカナ、学名を欧文で統一した。ただし、指定文化財としての名称などについてはこのかぎりではない。
8. 写真や図表には、章ごとの通し番号を付した。
  - (1) 景観写真および生態写真のキャプションには（ ）で撮影場所、撮影年月日、撮影者名を表記した。
  - (2) 標本写真のキャプションには（ ）で標本採集場所、標本採集年月日、撮影者名を表記した。
  - (3) 図表の作成にあたり、典拠とした資料名や引用した文献名などは\*を付して表した。
9. 標本採集場所については、小高区の字名までの表記を基本とし、河川や池沼、山、史跡、建物等の特定の名称は適宜掲載した。第6章については詳細な地名まで掲載することに努めた。文献から引用した場合には引用であることを示し、引用元の情報を適宜掲載した。
10. 引用文献は各章の末尾に示したが、第6章については各節の末尾に掲載した。文献の記載様式はおおむね次のとおりである。

[雑誌] 著者名 (年) 論文名. 誌名, 巻 (号数): XX-XX (ページ).

[単行本] 編著者名 (年) 書名, 発行者, 発行場所.

[単行本中の論文] 著者名 (年) 論文名. 編者名, 書名: XX-XX (ページ). 発行者, 発行場所.
11. 確認種リストにおける学名は、属名と種名を斜体で表記した。そのうち、正体表記で頭文字が大文字であるものは命名者名を表す。そのほか、正体で表記されているものには次のようなものがある。

[sp. ] (= species) ある属の種、または種名が特定できない1種の意味。  
複数種の場合は spp. (= species plurimae)。

[cf. ] (= confer) 「～を参照せよ」の意味。

[gen. ] (= genus) 属。

[et] ラテン語で「～と～」の意味。命名者が2人いる場合などに用いる。

[indet. ] (= indeterminata / indeterminabilis)

ラテン語で「不確定の / 確定不能な」の意。

gen. et sp. indet. の場合、属と種が不確定であることを意味する。

[subsp. ] (= subspecies)

亜種の意味。種に次いで下位の階級を表す。亜種名の前に表示する。

[var. ] (= varietas)

変種の意味。亜種に次いで下位の階級を表す。変種名の前に表示する。

[f. ] (= forma) 品種の意味。変種に次いで下位の階級を表す。品種名の前に表示する。

[×] 交雑、雑種を表す記号。

異なる種間で交雑したものを表す場合に「A種 × B種」のように用いる。雑種として学名が命名されている場合には「○○ (属名) × △△ (種名)」と表記する。

[nothovar. ] (= nothovarietas) 雑種の場合で変種にあたる分類階級。

12. 第6章の確認種リストの採集記録には、採集個体数、採集(確認)場所、採集年月日(日月年の順で、月はローマ数字で表す)、採集者等の情報を記載した。

個体数の表記で「ex.」(「exs.」は複数)は雌雄を判別していない場合に用いる単位で、「匹」「頭」に相当し、「2♂1♀」と記載した場合はオスが2個体、メスが1個体採集されたことを示す。

(写真)(目撃)は、採集によらず、それぞれ写真や目撃による記録で、個体数表記の末尾に表記した。

また、文献からの引用は採集地のみ記し、( )内に文献名を表記した。

13. 以上のほか、必要に応じ、章や節ごとに例言を設けた。

14. 執筆担当者一覧および協力機関、協力者の一覧は巻末に一括して掲載した。

